

# 同窓生シリーズ ⑬

## 天文講座と国際教育

駿台学園の理事長であり、八月十日には、千葉連隊に召集で入隊するはずであったが終戦によって無期延期。六中の三年の時に、新

委員でご活躍されている瀬尾秀彰さんに朝陽会館においていただきお話を伺い致しました。

### 個性豊かな同期生

昭和二十年に府立六中に入學されたが、入試の日が空襲警報で入試ができず、ほぼ全員入學することになった。とはいっても、推薦されてくるのは、大体各学校の一番から三番ぐらいまででしたから、ほんの一握りのエリートたち。その多くは海軍兵学校志望で、しかも軍事教練たけなわ、まさにぶん殴り教育であった。陸軍幼年学校合格者



**瀬尾 秀彰氏**  
 昭和26年卒業  
 昭和7年広島県生まれ  
 駿台学園理事長・学長  
 駿台学園中・高等学校校長  
 駿台アイランド国際学園理事長  
 藍綬褒章受賞者  
 著書「フェスタの誓い」他

部活は昼は新聞部、夜は天文部と掛け持ちで活躍され、学校の屋上には六インチの望遠鏡があつて、嵐の日にはみんな支えなければ飛ばされるような貧弱な設備であつたが、部員は熱心で、こ

教育制度に変わり、自動的に新宿高校に入學することになった。結局六中に三年間、新宿高校に三年間在學されたわけである。戦中、戦後のいちばんドサクサの時代であつたが同期生は、みな個性豊かなツワモノぞろいであつた。

ているわけである。また軽井沢には、日本のアマチュアでは二番目の反射望遠鏡を設置されて東大の天文の先生方も交替で研究にこられ週末には生徒も研究にやってくる。駿台学園では、とくに国際教育に力を注いでおられる。まだ国際教育などまったく関心をもたれなかつた時から、すでに韓国と姉妹校を結び、相互に先生を交換。音楽、美術、その他技術面で活発な交流がなされ、以後アメリカ、オーストラリア、フランス、ドイツ、ニュージーランドなども交流。昨年からは、アイランド政府の要請で駿台アイランド国際学校を設立されその理事長にも就任なさつた。

お母さん方に厳しい次のような直言。「昭和五十九年という年が、日本にとって大きな変革の年で、パートを含めた婦人労働者の数が専門主婦の数を越えた年なんです。そこで何が起きたか、大きな社会的な現象として二つあつた。ひとつは塾がものすごくはやって、子供を塾に預けて、母親が家に居ない。塾に入っていないのは、「ミジクジ」だというくらいで、中学生で七十パーセント。四十七パーセントは、家庭教師に食産業がはやって、家庭で母親が、あまり食事の用意をしない。この二つが実は教育に大きくかわってくる訳ですね。だからこれに対しての新しい対応、今後これがもつともっと増えていくと、その辺に対する教育が、

どう対応していくかが、重要な課題であると思ひます」今一番欠けている点は読書力と物を考えること。何よりも日本人に欠けているのは弁論、これをデイベイトというんです。即ち自己主張させることが絶対必要なんです。日本の教育は実はホームルームでやらせてはならないのに、それをやらせていませんね」親はもつと子供に議論をふっかけて、議論をお互にし合ふということが必要でしょうね。それに耐えるだけの力を親も持たなくっちゃ、したがって親も読書をしなくちゃいけませんね」

＊

そして「人間一日の内、一回はびっくりしよう」「びっくりするようない話を母親が子供に毎日一回したらよい」という言葉が、いちばん印象に残りました。

**お母さん方への直言**  
 教師、学校経営など教育現場の長い体験から現在の教育の現状」